

〔貴司山治小説集「丹波アリラン」解題〕

崩壊と、恢復の予兆・一九三二年～一九四五年

——解題を兼ねて——

伊藤 純

この小説集は、一九三二年の最初の入獄の経験を描いた「仲秋名月」に始まり、敗戦直後の丹波山中での開拓時代を題材とした（執筆時期は一九五五年）「丹波アリラン」で終わる。それは正に日本の国自体が、満州事変や国連脱退などを契機としてはつきりと戦争への道に進み始めた時期から、敗戦によつて総てを失う大団円の歴史的シーケンスと重なる。

この時代、プロレタリア大衆小説作家であった貴司は、他の多くの社会主義者と同じく徹底的な抑圧と、思想改変を強要する拷問的拘束を受け続ける。それによつて、貴司は思想的崩壊をとげるだけでなく、経済的基盤も、また私生活の基調をも喪失する。（そこには妻の死という意図しない悲劇が重なったこともあるけれど）

かくて、一九三二年から一九四五年にいたる時代は、社会生活も私生活も崩壊していく…：貴司自らが「肉体が変化してしまった」と書き記さざるをえないような究極の時代となった。「仲秋名月」「子」「皆なし」「愛染」はそういう究極の谷間への下降の様相を小説表現によつてフォローしていく。

そして、戦争が終わつた時、丹波山中の饑餓生活の中で、微かに人間の紐帯ちゆうたいを取り戻せるかもしれない予兆を感じ、それが「丹波アリラン」という作品になる。もちろんその予兆はまことに微かで、苦渋に満ちたものではある。しかし、同時にそれは、戦争が終わり、時代が変わつていくということが、どういふことかを感じさせる…：明らかに「仲秋名月」から「愛染」にいたるものとは違った新たな世界の入り口に立っていることを感じさせる。

この作品集は、いわばファシズムから亡国、そして戦後へという日本の近代史の中でおそらく明治維新と並ぶ最もドラスティックな変化の時代のただ中を「泳ぎ渡つた」一個の人間の軌跡を物語るといふ意味をもつだろう。そういう意図で作品を選び配列した。

貴司の略年譜と時代の動きを略記した年表を巻末に付したので参照されたい。

〔収録作品解題〕

● 『仲秋名月』

——最初の入獄経験を描いた獄中記

この小説は、貴司の最初の入獄（一九三二年）と、その入獄中に長男が生まれるという経

験を題材としたものである。初めて「他人の意志」……権力の悪意、を直裁に感じさせられる壁の中に閉じこめられて、その初体験に戸惑いつつも、まだこの時点では元気であり、抵抗の意欲に燃えている様子が描かれている。

主人公の三尾は拘置所の運動場の壁に石墨で「十一月七日万歳 J K P」と書いて懲罰を受ける。「十一月七日」は、ロシア革命記念日を意味する神格的な符牒であり、J K Pは日本共産党の頭文字である。あるいは、面会に来た妻が「中村屋のロシア菓子差し入れた」ということが「ロシア」という字句が含まれるが故に特定の感動が期待される。共産党員ではなくシンパサイザーに過ぎない貴司すらがこういった「符牒」に神格的な亢奮を仮託できる、そういう時代だったのかもしれない。

このようなエピソードは、ベルリンの壁崩壊から数十年が過ぎた今となつては非常な違和感を感じざるを得ない。いや、実はそれは社会主義が崩壊した現時点での「後知恵」としての違和感だけとはいえない。このようなエピソードは、当時の社会主義運動がもっていた、今では想像できない特殊性、狭さを反映している。当時の社会主義運動は、社会主義革命の総本山であるソビエト連邦という国家と体制を守ることに世界中の社会主義者、組織としては各国の共産党が百分従属することを大前提としており、日本共産党も正式には世界共産党日本支部であつた。世界で初めて誕生した社会主義の国ソビエトロシアは「公式見解」としては搾取のない、労働者の自由と暮らしが保証される夢の国であり、世界革命の根拠地であつた。だからこそ、これを守ることが社会主義者の第一義だつた。

しかし、このような社会主義者、プロレタリア作家の建前としての夢と、足下の現実の間には、プロレタリア文学が華やかな文壇の主役であつた一九三〇年代早期の時点から、大きなアンビバレンツが生じている。貴司がまだ拘置所に監禁されながらも抵抗の志を描いたこの年の翌年には、プロレタリア作家同盟の自壊的な解散がある。その、ほとんど悲鳴のような解散声明には、これが同盟員の不協力と離散による自壊であることが表明されている。

「…我が同盟の活動的作家たちは、…機関誌の発行の擁護、同盟費の納入、組織活動遂行等の一切の義務を放棄することによつて、絶対多数を以てそれへの不信を表明しつつあり、…指導部への批判乃至改選への意思を放棄することによつて、事実上同盟組織を形骸にとどめている情態である。……過去の政策に於ける機械的な極左的欠陥の克服を以てしても、従来の形式はもはや今日作家をつなぎとめ得ない。…して見れば、かかる組織の維持は意味をもたぬ。……分散的形式に散開することを妥当とする。」

昭和九年二月二二日「ナルプ解体の声明」（日本プロレタリア作家同盟第三回拡大中央委員会）より抜粋 *日本プロレタリア文学集別巻（一九八七年新日本出版社）

このような「夢」と現実とのアンビバレンツが、作家を打たないわけがない。そして事実、貴司もまたこれに打たれ、夢と現実の狭間に「蟻地獄」のように捕らわれ落ち込んでいく。「子」以降の作品がその状況を描くものとなる。

そう思つてみると、「仲秋名月」は、その、まだ蟻地獄の陥穽に気づいていない出発点の束

の間の「幸せ」をフィクションとして物語ったものといえなくもない。

この翻刻は、貴司直筆の原稿（おそらく初出「文芸」掲載のための生原稿と考えられる）に、戦後早い時期に計画された富山房からの出版（結局出版はされなかった）のためと思われる若干の修正が貴司自身の筆跡で加えられたものを底本とした。また、現代仮名遣いへの修正も行っている。

この作品の初出は一九三三年十一月「文芸」創刊号で、多くの伏せ字をともなつて掲載された。さらに戦後、一九八七年に新日本出版社「日本プロレタリア文学集三十」にも再録されている。

ところが、この新日本出版社版は、貴司の死後に、貴司直筆の原稿が存在することが知られていない段階で出版された。そのため、おそらく一九三三年の文芸創刊号所載の文章を底本とし、推定に基づく伏せ字起こしを加えて収載されたので、前記の直筆原稿と随所で違いがっている。

例えば新日本出版社版二八六頁では

「若いオルグは独房特有の病気にかかっているとみえ、のぞきにくる人間にたえず*****いたが……」（傍点は新日本出版社版の推定復元箇所、*****は復元不能として残された伏せ字）

とあるが、直筆稿では（当版八頁）

「若い朝鮮人は独房特有の病気にかかっているとみえ、のぞきにくる人間にたえず腹を立ててくつてかかっていたが……」

となつている。拘禁ノイローゼになつているのが、オルグではなく、若い、面会にきてくれる人もない（後にそのような説明がある）孤独な朝鮮人だというのはいくらか意味のある表現であろう。

また、新日版二八七頁

「かの女は三尾の、作家としての一面に向かつて、自分の漠然とした生活の望みを託して家を出てきたある田舎の地主の娘にすぎなかった。」

という回りくどい一文は（当版九頁）

「かの女は大阪のある大きな地主の娘であった。ふとしたことから三尾と恋仲となり、自由の生活を慕つてその古い家から出てきたのであったが……」

と明快に修正されている。

獄房のドアに取り付けられた無双窓が外界と通じる唯一の窓として再三出てくるが、はじめこれは無双窓から夢想窓と修正され、さらに「無窓まど」となおされている。これでは「無窓窓」になつてしまい、思い違いといわざるを得ない。普通には「無双窓」であろうが、ここは牢獄での想いをこめたかもしれない「夢想窓」という言葉に統一した。

——小林多喜二虐殺前後の人間群像

この五〇枚の小説は、小林多喜二の拷問死前後を直接に扱った小説であり、その虐殺が行われた一九三三年（昭和八年）二月二〇日に近い同年八月の改造に掲載された。

その凄惨を極めた拷問死の実態は、当時、在京の主要な大学医学部が屍体の検案を拒み、公的にはそのような虐殺は存在しないものとされた。虐殺は、関係者には目前の事実であったにもかかわらず、そのことに触れるのは最高のタブーであり危険なことであった。従つてこの小説では、多喜二の虐殺そのものを題材としながら、拷問死の記述は一行もない。ただ、通夜の場面で、多喜二（成田という名前で描かれる）の遺体に対面するが、その遺体の顔色は「汗をかいた後のやうな青白い表情」とだけしか書かれておらず、さらに——

「三尾は少し蒲団をめぐつてかれの胸の所をはだけてみた。……ついこの間の血色はそこには失はれてゐた。そして何の真似か、バンソーコーの小さなきれつばしが左の乳の下にはりつけてあつた。」（下線は改造誌上で伏せ字とされた部分）

とだけ記されている。「何の真似か、バンソーコー一片」というのがぎりぎりの抵抗的表現であり、それも伏せ字にせざるを得ない状況だった。

この小説は多喜二の虐殺という事実をレポートするものではない。にも関わらず、この事件が、人の心と時代の変転のどまんなかに真つ黒な深淵を開いて見せた、その恐ろしい有様を描出し、ひそかに事件を記念しようとしたものであろう。

小林多喜二への拷問と屍体の状況については、江口渙が、小林と同時に捕まった今村恒夫の話や、引き取った遺体を安田徳太郎医師とともに直接調べた所見にもとづいて以下のように記録している。

「……拘引された警視庁築地警察署において、寒中、丸裸にして細引きで後ろ手に吊し上げ、ステッキや木刀での乱打を皮切りに、気絶すると水をかけて息を吹き返させ、様々な拷問を二時間以上繰り返し、一九三三年二月二〇日午後四時頃、死に至らしめた。

屍体の状況は、顔面に五、六箇所打撲と内出血、首を一周する内出血を伴う細引きの跡、両手首にも内出血をとまなう索状痕、下腹部、太股は一面に暗紫色の鬱血状態で、腹、太股、陰茎、辜丸までがはちきれそうに膨満し、異常な大量の内出血が下半身全部に充満し、内臓や腹部の血管が激しく損傷していることを思わせた。

さらに、太股には錐か釘を打ち込んだと思われる皮膚がやぶれ肉が露出した穴が十数箇所も認められた。

脛には角材などの強圧でできたと思われる削り取られたやうな傷跡がいくつもある。さらに多くの人々に惨劇の極地を感じさせたのは、右人さし指の骨折である。これは指を逆方向に強引に折り曲げてへし折られたものと考えられた。」

江口渙「われらの陣頭に倒れた小林多喜二」から要約（定本小林多喜二全集 第十五巻、一九六九年新日本出版社）

貴司はこの作品の背景について、昭和十年四月号の「文学評論」の「小林多喜二との最後の対談」という記事の中で（……は中略部分）

「僕が小林多喜二に最後に逢ったのは……三三年二月上旬だったと思う。……三三年の春、あまりいい印象の別れ方をしていない僕は小林に対してその時やはり喜んであうだけの気のりがしなかった。一口にいえば小林はそれまで僕を……仕事の上の批判をこえて個人的に排斥していた痕がかなりある。……（その後貴司は半年あまり拘禁された）そして出てくると早速あいたいからとてよびにくるところに小林の一徹な無邪気さがあるのだが……」

二人は道ばたの古びたうなぎ料理の仕出し屋にはいった。……ここで、かれは実ほとんどでもない話をしたのだが、短いこの文章の中へ書く誤解を生ずるおそれがあるので、今は省いておく。そのとんでもない話の外に、かれは三つの話を僕にした。第一、ハタ（赤旗）の読者になれ。第二、金を出してくれ。第三、徳永と共同して林房雄とたたかえ。

……その外細かい話をいろいろした……がさして重要な話題はなかった。

……その後私は「子」という小説を書いた時にこの時のことを若干利用した。……それから二週間ほどして、かれの死顔に接した時、この最後の対談の時生きていたかれの顔より、何十倍も……かれの死に顔は遅しく偉大に、安らかにみえた。」

と書いている。ここである「とんでもない話」というのは次項の小説「一九三三年」で紹介されている作家同盟の組織問題のことであろう。

また、この小説では登場人物の実在のモデルが推定できる。三尾が貴司であれば、山村は中野重治、岡は中野夫人の女優原泉、成田はいうまでもなく小林多喜二、デスマスクをとる演出家小川は千田是也、手伝った若い彫刻家は佐土哲二（国木田独歩の次男、榎本武揚の孫）である。

いくつかの前置きや伏線があるが、この小説の山場はやはり、突然非合法潜行中の成田、つまり小林多喜二から逢いたいというレポがきて、渋谷道玄坂上の小さな天ぷら屋で会うシーンであろう。

成田は、街頭でかいま見た三尾の幼児とのなごやかな情景に、なぜか、潜行中のアジトに帰ってから一人激しく泣いたと告白する。それは、もう半年逢っていない母親への激しい恋慕が根底にあったからだということが語られる。成田という強固な指導的活動家が、恐ろしいまでにナイーブでみずみずしい、十代の少年のような純情無垢な男として描かれる。この時点での小林や中野とおぼしい人物の描き方は、ほとんど同性愛ではないかと思える程に生ま生ましい。

そしてさらに重要なことは、ここで、家族愛とか男女の愛という、いわば近代的、自然主義的な人間観からでてくる「私生活」のモチーフと、社会主義実現という政治的当為、倫理的至上命題（……と当時の社会主義運動の中で信じられていた）にたいする「絶対的従属」という一種の「公的生活」との整合を……既に当時の時点ではほとんどの人が放棄し逃避した

その「整合」の作業を、いかに成田（すなわち多喜二）がなそうとしたか、主観的には、その作業にいかに成功をおさめつつあったか、ということ、成田自身の言葉として語らせていることである。

この主題は、多喜二の遺作ともいうべき「党生活者」の内容と深く関わっている。

「党生活者」には、倉田工業（藤倉電線東京工場がモデルとされる）での労働者の闘争を舞台として、その闘争をオルグする共産黨員「私（佐々木）」の、厳しい官憲抑圧下でのオルグ活動と、母親、および支持者であり後には同棲にいたる女性笠原、などとの「私生活」という二つの側面が描かれる。そして、ことに「私」と「母親」との関係においては、たとえ「これから何年目かに来る新しい世の中にならない限り……私は母と一緒に暮らすことがないだろう」というように「最後の個人的生活の退路……肉親との関係を断ち切ってしまう」ても、その母親との紐帯を確信していられるような関係が成就されつつある有様が叙述されている。

貴司は、虐殺直後に彫大な削除と伏せ字をともなうて中央公論誌上に掲載された「党生活者」（禁圧を回避するために「転換時代」と改題され掲載された）の掲載や解題に関係しており、また、その後の小林多喜二全集の編集刊行にも深く関わっていた。当然、削除伏せ字のない「党生活者」の内容を知悉してははずである。

この「子」という小説は、伏せ字削除だらけの「転換時代」を補完し、ことにその重要なモチーフである、党活動を完遂しながらなおかつ「孝行息子」であるという究極の地点を描こうとした、その「党生活者」の主題を、身近に小林を知る第三者の目からリフレーズしようとしたとも考えられる。

ところで、この小説の復刻については若干の問題がある。これは一九三三年八月の改造に多くの伏せ字をともなうて掲載された。幸い、その元となった伏せ字部分を含む生原稿が存在し、そこから完全な原文を復元することができる。しかし、この生原稿には、戦後出版が計画された富山房のためと思われる修正が、「見え消し」の状態ではあるが、多く加えられている。

本来この作品を復刻するなら、この、事後に加えられた修正に基づくのが本来と考えられる。ところが、この修正を原文と比べると、特に最後の部分で、最もクリティカルで重要な警察の拷問を暗喩する「まあ公は重たくなつたね。さあ逆さにつるしてやらう。稽古たせ……」といった文章が、何ということのない子供をあやす情景に書き換えられているのである。

なぜ、抑圧の無くなつた戦後になつてあえてこのような重要な表現を削除してしまったのか、その真意はわからない。あるいはこのような「引かれ者の小唄」のような文章はみつともない、とも思つたのだろうか。しかし全体的に見てこれらの戦後の修正は、多喜二虐殺直後の緊迫した原文の雰囲気損なう弊が甚だしい。そこで、この翻刻ではあえて、戦後の修正によらず、オリジナルの記述によることとした。

これは、遺品の中から発見された、戦後、一九六〇年ころに書かれたと推定される未発表小説作品である。

一九三三年という年は、貴司にとって最初の検挙拘留をうけた翌年であり、また小林多喜二虐殺という事件の年でもあり、きわめてクリティカルな時期であった。貴司はこの時期にあえて、共産党・宮本顕治の地下活動に直接の援助を試み、また小林多喜二全集刊行の世話役を買って出るなど、相当な覚悟で左翼活動にコミットした。他方、社会主義運動、プロレタリア文学運動は激しい弾圧によって終末的な状況に追い込まれていた。

翌一九三四年には貴司自身再度検挙され三ヶ月の拘留の後治安維持法違反で起訴され、転向を声明する。この拘留中に、作家同盟は解散し、プロ文学運動の事実上の崩壊がある。一九三三年はいわば、貴司にとっても日本のプロ文学運動にとっても壊滅寸前の最後の一年と位置づけられる。

この未発表原稿は、多分戦後、一九五〇年代後半か一九六〇年代の早い時期に、この究極の時代を回想して書かれたものと考えられる。小説の体をとりながら、この最もクリティカルな時期に、貴司自身が何をやってきたか、またどのような心境にあったかを記録にとどめておこう、という意図で書かれた一種の裏面史、というふうにも思える。

主筋は、熱海事件によって壊滅した共産党の再建に取り組む宮本顕治との密会であり、その宮本の若さに不安を覚えながらも資金提供の約束をするというエピソードである。

さらに、友人の法曹関係者から、共産党中央委員となつて共産党の中樞を握っていたスパイ松村（本作中では杉村）の極秘情報を聞かされて顔色を失うと同時に、今までの党や周辺への献金の総てが正確に特高に把握されていたことの謎が氷解するといった話や、宮本密会の連絡にくる、幼子二人を抱えながら黙々と危険な党活動に従う女性への畏敬（このモデルは語られる挿話から佐多稲子と推定される）、小林多喜二全集編纂について、この仕事を作家同盟、さらには共産党中央が直接やろうとする一種の閉鎖主義でかえって刊行の仕事が頓挫してしまつた、その仕事を引きついで欲しいと宮本から依頼される、とか、いわゆる「直話」でなければ聞けないような話がいろいろと綴られている。（この依頼に基づいて、貴司は一九三五／六年にナウカ社から「小林多喜二全集」を編纂刊行した）

なかでも注目されるのは、この、宮本との密会に使われる東京下町の目立たぬ一室が、貴司が地下鉄争議の詳細な顛末を、クビになつた争議メンバーから取材するために用意した隠れ家だという一節である。貴司は、この時期以前に、作家同盟の「芸術大衆化論争」で一貫して右翼偏向、卑俗な大衆主義をプロレタリア文学に持ち込んだと批判の矢面に立たされ、作家同盟中央委員からも追出されてしまう。この批判を「仕事で見返そう」として発想したのが、労働者の生活と戦いを総合的に調べて書くという、後の言い方であれば社会主義リアリズムとでもいうような発想で取り組みだした地下鉄争議の小説化であった。東京地下鉄争議は

この一年前、一九三二年に起こった、当時共産党指導によって成功した代表的争議とされ、その華々しい顛末は日々の新聞を賑わせた。貴司はこの下町の隠れ家で十人以上の関係者から詳細な聞き取り調査をおこなった。

最近その詳細な調査ノートが発見されたが、作品自体は第三章までで中断し未完となっている。その未完稿をみると、単に争議の顛末を物語るだけでなく、貧しい農村の青年が東京に出て地下鉄労働者として成長していく過程を、いわば昭和の一人の若者の成長過程として全体的に描こうという意図が察せられ興味を持たれる。(この未完となった長編小説「地下鉄」は、『貴司山治研究』〔貴司山治全日記DVD版別冊・二〇一一年不二出版刊〕に収載されている)

このように、「一九三三年」という作品は当時から二十年あまり過去のこととなる非法時代のドキュメンタリーのような作品であり、一九六〇年代の早い時期に書かれたものと推定される。

もちろんこれは事実の記録としてではなく、「小説」として書かれたものなので、その史実性、資料性を直ちに認めるべきではないが、大筋において事実在即して物語られていると思われる。日記その他、他の記述と概ね符節するからである。

(例えばこの小説中にある「小林多喜二全集の編纂発行を宮本顕治から依頼される」というエピソードは、宮本自身は戦後否定しているが、総合的に検証するとその事実は存在したものと考えられる。これについては拙稿「小林多喜二全集の編纂過程〔戦前編〕」占領開拓期文化研究会研究誌『フェンスレス』二〇一三年、で詳細に検討したので参照されたい。)

因みに、この小説中の伊達は貴司自身、成田健はいうまでもなく小林多喜二、高宮は宮本顕治、西村鞠江は中條(宮本)百合子、祝田は岩田義道、古川は蔵原惟人、杉村はいわゆるスパイMII松村(本文六一頁の注記参照)、宇月弁護士は、書かれているように戦後の社会党内閣の法務総裁であるなら、新憲法の制定にも関与した鈴木義男である。地下鉄の争議メンバーを捜し出して貴司に引き合わせる辻本は、戦前、共産党系労組であった全協のオルグの永田耀(あきら：昭和四十年頃死去)であろう。

● 『砦なし』

——戦争へ……急激な時代の転変と、田井為七の追想

この作品は、執筆時期(一九三六年)から数年前の、まだ左翼運動が官憲とのせめぎ合いの中で厳しく行われていた時代を回想する一種の内幕話の体をなす小説である。しかし、主題とするところは単なる回想ではなく、たった数年だが、いまはもう社会主義運動など思いもよらない時代になっているその時代の転変に驚き、かつて心の砦と信じていた社会主義の大義もどこかへ失せてしまった「砦のない」状態をあらためて思い知るところにある。おそらく当時の多くの「進歩的知識人」の心情的な「最後の砦」であったスペイン市民革命が、列強の

黙殺の中でファシスト・フランコに蹂躪されていく、そのニュースが街中に響く最後のシーンは、まさにこの時代の「皆のない」、心情を浮き彫りにする。

それらのことが、大阪のローカルカラーの中で語られるが、この作品のもう一つの注目点は「田井為七」という貴司にとって思い出深い一人の人物の追想である。これを書きとめておくという意図も推察される。

田井為七は貴司の同郷で大阪で組合活動をし、一九三二年頃には党中央委員にもなった人物である。しかし闘士型ではなく痩せて小柄な、いつも半分はカモフラージュの意味もあったらしいが、薬瓶を下げて飄々とやってきたという。その思い出は生前貴司自身からよく聞かされた。戦後、この田井が大阪で存命であることを知り、貴司は老いを押しつわわ訪ねていったが、両者とも老い深くこの再会はあまり要領を得たものにならなかつたようである。この再会の三年後に貴司は死んでいる。「皆なし」を読むと、一人の女を媒介とした、貴司と田井の数奇な、因縁浅からぬ所以がよく分かる。

この作品の初出は一九三六年福岡日々新聞と記録されているが未確認である。一九三六年十月号の日本評論にまとめて掲載された。さらに戦後になって、実現しなかつた富山房からの刊行のための加筆稿（ほぼ日本評論掲載稿に一致する浄書稿に自筆の訂正書き込みがある）が作られている。仮名遣いが現代仮名遣いに直されているほか、若干の推敲が加えられている。本書はこの富山房向け修正稿によっている。

● 『愛 染』

——戦争への十年を背景とした、ある老作家や女たちとの数奇譚

この小説は、まだ戦争の余燼が残る一九四八年に「月刊読売」に二回に分けて掲載された。この掲載稿は掲載誌の性格からいっても、娯楽的な「情痴小説」という狙いで書かれたものと思われる。ただ、この掲載後、再度原稿用紙に書き起こされて大幅な改訂が加えられた。単なる娯楽的な情痴小説ではなく、一九三五年頃からの戦時体制の深化の下で、思想的、社会的にはもちろん、私生活の上でも追い詰められ崩壊していく一人の人間を追う作品に改作しようとした意図が見える。この改作稿は生前、活字になることなく残された。本書に採録したのはこの改訂稿である。

主人公を追い詰めるファクターの一つはもちろん、社会主義的な思想の片鱗も許さない執拗な官憲の圧力である。悪臭とシラミと、横になる隙間もままならない、収容者で満員の警察留置場への、取り調べも何もしない期限を定めぬ長期拘留、執筆禁止による収入の途絶……など、殴る蹴るの拷問より一段と巧妙になった究極の拷問手法。これによって被拘禁者は何も強要されなくても自ら思想を変えていく。この小説ではそのことを「肉体が変化する」と表現している。つまり、肉体が変化することによって思想も「自然」に変化するのである。

加えて、この主人公の場合、重い結核で寝たきりの妻と、対称的に何やら世間離れた宇宙人的風情のある活発な女性と、その両方の狭間にはまりこんだ厄介な私生活がある。

さらにこの小説では、もう一つ、意表をつく登場人物がある。小山秋栖しゅうせきという、どこからみても徳田秋声その人に紛う方無い作家が登場する。徳田秋声はいうまでもなく、情痴……というよりも、情痴と乱調にまみれながらも断固としておれの生きざまを貫いていく女たちを、繰り返し繰り返し書き続けた作家である。この小説の中でも、小山秋栖が「性というものは動物的な側面だけでなく、文化的な面がある」と喝破するところがある。つまりは、情痴の沙汰こそ、人間の人間たる姿が顕現する最たる場だ、という意味になるだろうか。

どうも、この小説にある意味で唐突に小山秋栖先生が登場するのは、情痴の沙汰を人間の文化・文明と位置づけてくれる秋栖先生こそが、病妻と元気な女の狭間に落ち込んで、情痴の蟻地獄にもがく主人公を、人間のあり得べき姿として弁護してくれる、弁護人たることを期待してのことだろうと推測される。

そして、もう一つのサプライズが抜かりなく用意されている。病妻が死に「元気な女」とも別れた主人公が耽溺する茶屋遊びの中で巡り会う二人の美妓が、なんと秋栖先生のご落胤の双生児だったのである。こういう双生児の娘たちが芸者に出ていた、というのはフィクションではなく、徳田秋声の小説のある程度読んだ人ならみな知っていることらしいが、この崩壊の極地での夢のような美女達との交わりが、主人公にとっての崩壊の十年を、うたかたの数奇譚としてとりまとめる役割を果たす。戦争が終わって、かつてのお茶屋がどこにあったのかも分からぬ木挽町の焼け野原で、あの女達の情報も今は絶えてしまったことを主人公は聞かされて小説は大団円となる。

貴司山治日記を読むと、この数奇譚がほぼ事実上添った物語であることがわかる。

更に「事実は小説よりも奇なり」という言葉を地で行くような驚くべき後日譚も日記に記されている。戦後数年、貴司は、この双子の中でも伶俐で心に残っていた姉の女が、丸の内道のばたで靴磨きになっているのに再会し、「ここまでおいで」という余り出来のよくない小説を書いているのである。

● 『丹波アリラン』

——敗戦、弱者への無限の共感と、人間回復への希求

貴司は、一九四五年（昭和二十年）五月に京都の丹波山中に開拓農民として入植した。胡麻という駅からさほど遠くない入植地だったが、何の配慮もなく表土を削り去って赤土むき出しに整地された農地では、そうおいそれと作物ができるわけもなく、私の記憶でも百姓として到底ものになったとは思えない。しかし他方で、突然やってきたいくらか名の知れた作家として珍しがられたのか、京都府農地委員・未墾地解放係に任じられたり、全日本開拓者連盟の創立に加わり、中央委員をつとめたりした。

この丹波での、敗戦直後の混乱を極めた状況から発想されたのがこの小説である。

ここに登場する人間達は、まるでチェホフの小説の登場人物のように、みんなどこかおかしい「疵物」である。開発営団の小役人は「ナマコ」「ブタ」とまで形容される無能、無神経、強欲、ゴマスリの肉塊でしかない。飯場を営む朝鮮人は傲慢と卑屈をないまぜたイヤな男だ。夫を戦場に取られた寡婦は半ば狂乱して「夫をすぐ帰してくれ」と泣訴を繰り返して、その息子は草を食んでいた飼牛の舌をカマで切り払い、牛は小屋にこもって血まみれで呻いている、という始末である。飢えをしのぐために今まで何かと助け合ってきた、一番気心の通じあえた開拓の同輩ですら、今は終戦利権に目の色を変えて別人のようになっていく。

要するにまずこの小説で目に付くのは、深い人間不信と苛立ちである。それは、あの一九三三年以来の崩壊の歴史の中で増殖されてきた抜き差しならぬ人間観であろう。

ただ、この小説集の中で、「丹波アリラン」だけが、その不信を越えようとする微かな曙光のようなものを感じさせる要素を持っている。それは、あの八月十五日に感じられた「やっと戦争が終わった」というえもいわれぬ安堵感、解放感につながるものでもあろう。しかし、それ以上に強烈な存在は、究極の飢えにさらされながら、決して盗みもしようとせず……いや、根っからそんなこともできぬお人好しの、昨日から何も食っていないという状況の中で照れたような微笑みを浮かべている一人の朝鮮人飯場の親方の姿である。作者は、このどん底に落とし込まれた一人の朝鮮人の微笑に、初めて人間の尊厳を感じ取り、人間不信を回復する微かな予兆を思っているのである。

「丹波アリラン」の主人公は、半島をはるか離れた丹波の山中にうち捨てられ、おそらく昨日から何も食っていないに違いない朝鮮人一家の誰かが、暗闇の中で低唱するアリランの歌声に凝然と立ちつくす。そこには弱者に対する無限の共感と、人間回復への希求が強く暗喩される。

実は、貴司の文学の基調には、この弱者への共感がいつも底流している。多くの作品の根底に……出来合いの大衆的作品でさえも……このモチーフないし「気分」が底流している。

本当は、貴司にとって「唯物弁証法的創作方法」も「社会主義リアリズム」も実はどうでもよかったのかもしれない。貴司が本当にモチーフとしたかったのは、弱者への共感と、それを通しての人間回復、人間連帯の夢だったのではないか。「ゴー・ストップ」から「丹波アリラン」までの二十年の流れを概観して、思うのである。

「丹波アリラン」は一九五五年五月『農民文学』創刊号に掲載され、その後、家の光協会刊行の「土とふるさとの文学全集十三巻」に大きな改訂無く収載されている。本書は雑誌初出によったが、明らかな誤植や仮名遣いの不統一は修正した。

以上